

## 研究ノート

# さまよえる中年期から輝ける老年期へ ——「英智」の人とは——

丸 島 令 子

### はじめに

1947～51年生まれの団塊の世代もそろそろ定年という年齢に近づいており、彼らが65歳以上の年齢に達する2020年には、65歳以上の人口が日本の全人口に占める割合が26.9%になるものと予測されている（国立社会保障・人口問題研究所推計）。そして21世紀の半ばには3人に1人が高齢者になるということである。現在ではその比率は17.2%であるが、わが国はすでに高齢化社会とみなされている（国連の統計によると7%を超えると老化の進んだ国とされ、14%になると高齢化社会とされる）。

ひと昔前までのわが国では70年も生きた人に対して“古来稀なること”として古老あるいは長老と呼び、先祖伝来の価値の守護者、連続性の敬うべき担い手として遇し、彼らの意見を尊重した。しかし現在では、このような特定の心身の頑健な、運の強い人がそうした人生段階に達する特権を持つのではなく、それは大多数の人のものになりつつある。ところが科学技術の発展と価値観の転換は、高齢者がもはや価値や伝統の連続性の担い手になれないばかりかその社会環境の足並みについていけない存在になり下がろうとしている。たとえば、世をあげてのIT革命において、単純なコンピューター操作の一つも若い世代に依存しなければならない場合もある。高齢者にとって過去に培った経験や知識を伝えたくとも役に立たない。そして人口の大きな部分を占める彼らの

集団は機能を持たない集団として社会的にも個人的にも災難視され、罪悪感が蔓延した停滞感をもたらす可能性が懸念される。

65歳まで未だ有余のある団塊の世代のみならず、今日の中高年者は彼らの老年期をどのように生きるか、真に“楽しく老いる”にはどうすればよいのか、まともに取り組む必要を感じている。もしかしたらこのことは女性、男性を問わず21世紀の人類の差し迫った課題であるかも知れない。高齢化社会の中高年者はこれからの自分達の将来と、子や孫の世代を守るために何ができるのだろうか。また一般的に言って、人間は高齢になればなおどのような能力を持って、社会の中で生産的でありうるのか、もっとよく知る必要がある。こうした問題について諸科学はどのような研究成果をもたらしているのだろうか。

本稿は、主として中年期、老年期における成人の自我の発達心理学的研究から、人生の最終段階での人間の固有の能力は何かを探るために、1980年代頃から知能や創造性の概念とともに検討されてきている英智 (wisdom) について考えていく。

## 1. 中年期の危機の意味するもの

自我の生涯的な発達を提唱した Erikson (1950, 1963) によると、中年期の終わり頃、60歳前後までは自分の家族や社会のために、ひたすらその維持と発展に尽くし子どもを産み育て、さまざまなものを生産し、次の世代のためにも配慮した行動を取り、それらを通して自分自身の能力を培い人生の目標や夢を実現してきたという自信を持った成人は、中年期の心理社会的な発達課題「生殖性」(「世代性」とも呼ばれ Generativity という) を達成した人とみなされる。

この Erikson (1950, 1963) の考えは今日もなおさまざまな概念的検討が加えられたりしている。Kotre (1984) は generativity (生殖性) について①生物学的な、親的な育みと世話をすること、②人間文化の基底となる、技能、技術、言語などを次世代に教え伝えること、③人間文化の意味、創造性、革新、伝承の継承者として働くこと、という実際の行動との関係から説明した。

こうした中高年者の心理社会的発達課題は人類存続のための世代を繋ぐ肯定的な機能のみに注目されがちである。つまり Erikson (1950, 1963) は中年期においては自我発達のための発達課題達成は彼らの心理的適応をもたらすが、その達成が困難であるときは停滞感と人格的貧困化をもたらす心理的危機として説明した。ところが Kotre (1984) は中高年者が“育み世話”をし“人間文化の次世代への伝承”のために尽力をしても、かならずしも肯定的な結果がもたらされるとはいえない生殖性の暗部を指摘した。すなわち Generativity (生殖性) が表現される文脈は時代や環境の変化、将来の展望などからなり、そこには最適な判断 (多分、英智のような) という高次の知的能力が関与されるべきであることが示唆されており、複雑である。たとえば今日、アメリカの中高年者がテロ撲滅のためにアフガニスタンへ軍事侵攻したことは、将来の人類にとって悪影響をもたらす可能性を孕んだ生殖性の暗部かもしれない。ともあれ中高年者は、この世界の維持と発展の担い手として期待されており、それに相応しい自我発達に失敗している場合は、心理的、精神的な苦悩や迷いによる人格的な停滞感にみまわれることは考えられる。それらが誇張して表現される場合、中年期の危機と呼ばれる。

たいていの現代の中高年成人は、未だ若い時から鍛えてきた身体的、精神的な諸能力を維持し、まだまだバリバリ働ける余力を持っていると感じているだろう。しかし、40歳代頃、彼らの多くが初めての老眼鏡を手にしたとき、自分の生理的機能や体力の衰えが意外にもいろいろな面で進行していたことにも気がつき、心の動揺を体験するかもしれない。今日ではそうした加齢に伴う生理的、身体的機能の変化についての詳細なデータが蓄積されて、視覚機能の一部などは、Fig. 1 に示すように早くも10代、20代で低下が起こることも知られるようになった (西信, 1986; Pitts, 1982)。

現在、50代、60代、70代の年齢の中高年者は今日のわが国の繁栄を築いてきた人々であるが、自分達が培った経験や知識の多くが、時代の変化によりもはや日本では場違いなものとなりつつあり、彼ら自身がこれからの社会に適応す

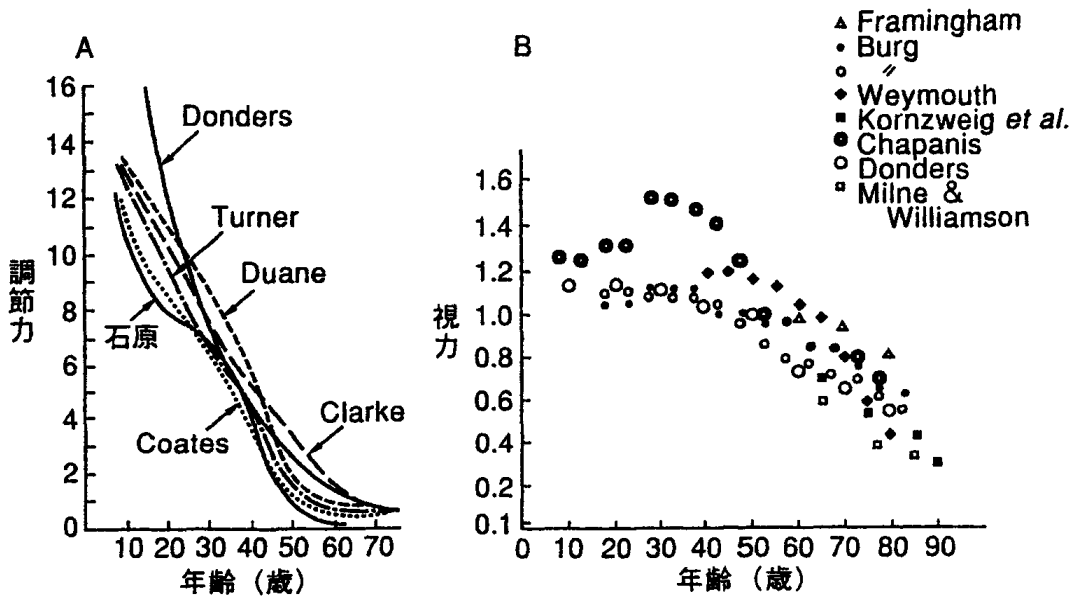


Fig. 1 視覚の加齢変化

A. 調節力の加齢変化 (西信, 1986)

B. 視力の加齢変化 (Pitts, 1982)

るために新しいものを習得しなければならないと感じている。そのためデジタルの世界におずおずと入りパソコンに熱中する彼らの姿がここかしこにみられる。そしてそれなりに快適に適応している事実が珍しくもなくなっている。たとえば、孫とEメールの交換を楽しむおばあちゃんや、膨大な情報ネットワークを駆使して、勉強や遊びやボランティア活動にいそしむ引退した紳士や、中高年の主婦等、多くの事例がみられる。これらのことはパソコンに典型的にみられる現代の新しい知識や技能の習得が、かなり高齢になっても可能であることを示しているといえるだろう。その反面で、視力や手指の運動など、今までとは違った局面の生理的機能の多くを必要とする新しい技能の習得は中高年者にとっては非効率的でもある。だからといっていつも若者に依存しているわけにもいかない。パソコンは急速に人間生活の必需品になりつつある。人間の諸機能に関する加齢変化の研究とそこから開発される簡便なハードの進化が一層期待される。

このように今日、現実世界への適応が中高年者の大きな課題となっている。人生最早期の子ども時代は養育者に依存できないことが根源的な恐怖と結びつ

いていることは多くの発達心理学の研究が示しているが (Bowlby, 1969)、中高年期では心身の機能の喪失に伴う他者への依存の恐怖が自己改革や適応へと彼らを強迫的に駆り立てるものと考えられる。中高年者にとってそのような恐怖や強迫性は世の中の進歩という現実にあって絶望感をつのらせ、自尊感情が傷つけられ、ひいては精神的な歪みとなるかもしれない。こうしたことを避けるためにも中高年者は自らの年齢と関連した心身の諸機能についてよく理解しておく必要がある。

## 2. 高齢になって得る能力はあるか

年をとったからというだけで賢いとか完全だとか自慢するわけにはいかなかった今日、年配者の固有の能力として価値あるものは何であろうか。前述の Erikson (1982) は人生の後半に人が失うものは、身体組織における全体的な弱体化、精神過程における過去、現在の経験をめぐる記憶の漸次的喪失、生殖的相互交渉における有効な機能の急激で完全な喪失、などの危機をあげている。そうした心身の統合の崩壊にさらされ、今や人生をやり直すには時間がないという焦りが絶望となって心がゆれる。Erikson (1982) は、人はこのような危機の中で、ただ一つの自らのライフサイクルを究極のものとして受け入れ、何らかの秩序と意味を見出し統合しようとする葛藤を乗り越える、その過程で「英智」という人格的能力が開け希望 (hope) という力強い潜在力が湧き起こってくると説明した。つまり「英智」は自己発達の頂点としてとらえられ、それは「死そのものに向き合う中での生そのものに対する聡明かつ超然とした関心」と表わされている (Erikson, 1982, P.79)。

このように Erikson (1982) によって年齢を経たときの固有の人格的能力について示唆されたのであるが、英智の概念はそれ以前にむしろ初めは認知心理学における発達論の中で関心が持たれてきた (Kitchener & Brenner, 1990; Labouvie-Vief, 1990)。つまり知能について、また知能と創造性、知能と英智について、というように研究されてきた (Cattell, 1963; Guilford, 1950)。そこで

次にこれらの研究を概観しながら英智という能力とはどのようなことを意味するのか考えていきたい。

20世紀の半ばから知能は多次元的概念でとらえられるようになり、Wechsler (1998) により「Wechsler Adult Intelligence Scale: WAIS-Ⅲ：成人用知能テスト」が開発され、中年期、老年期の知能の発達過程が究明されるようになった。これにより高齢者の正しい知的水準の知識が得られるようになった。Wechsler (1958) の知能の考え方である「個人が、目的的に行動し、合理的に思考し、効果的に自分の環境を処理する総合的または全体的能力」という知能についての包括的な定義は、現在広く受け入れられている。彼はその考え方の基本に6個の「言語性知能」と5個の「動作性知能」の次元を示し測定する方法を示した。後年、Cattell (1963) もまた知的能力を二つに分けて、環境に適応するときに働く「流動性知能」と経験の結果、習慣化した解決力に当たる「結晶性知能」を示した。その後、Wechsler の「言語性知能」は Cattell の「結晶性知能」に相当し、もう一つの「動作性知能」は「流動性知能」として認められている。

以上のような知能の考え方に基づいた今日の実証的研究では、20世紀前半まで知能は青年期の終わり頃ピークに達し、その後は衰退の一途をたどるとみなされていたものが、知能はその内容によっては発達及び老化が一律ではなく、また老年期においても知能の低下がそれほど大きくはないという結果が知られるようになった。これについての有名な研究として Fig. 2 に示された Schaie (1980) の研究があり、それによると言語性知能（語彙得点）もしくは結晶性知能は60歳までは少しずつ上昇し、それ以後は徐々に低下することが示された。動作性知能（図形処理得点）もしくは流動性知能は30歳頃ピークに達し、それは60歳頃まで維持され、その後の低下は比較的急激であることも理解された。そして実際に知能の低下がみられるのは80歳以降の老年後期であることが示された。またわが国の東京都老人総合研究所における中里ら（中里・下仲, 1990）の研究では、73歳から83歳までの高齢者に対して10年間3回の追跡調査を行った結果、「流動性知能」は低下していくが、「結晶性知能」は低下してい

さまよえる中年期から輝ける老年期へ

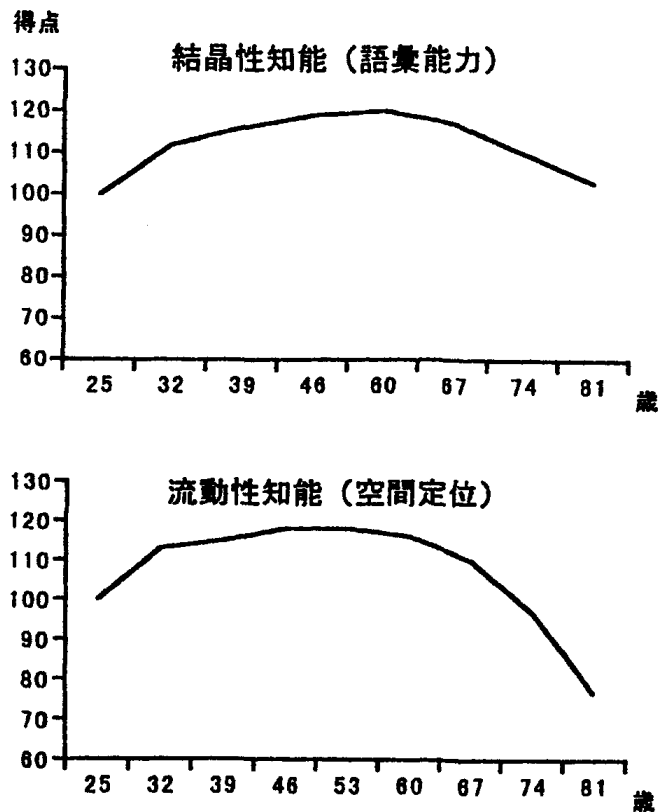


Fig. 2 系列法による知能の発達曲線 (Schaie, 1980)

かないことを発見した。これらの知能の発達と衰退に関しては加齢のみならず教育年数や性の要因がかかわっているという報告 (中里, 1984, 1995; 中里・下仲, 1990; Schaie, 1980) もみられる。しかし教育年数はその時代の教育システムに、また性差はその社会的背景にと、いずれも個人やジェンダーに対する制約が反映したものと解釈され、今後社会の構造変化によりそれらの差は縮まるものとみなされている。

知能と「創造性」と「英智」についての関連性が研究された興味深いデータを見ることにする。まず創造性と知能との関係について、Guilford (1973) は彼の知能モデルにおいて創造性を拡散的思考 (一つの問題に対していろいろな異なった珍しい解答を生み出す思考) と関連づけて検討した。それにより研究された結果から、創造性と関連した知能は過去に考えられていたほど年齢による急激な低下はなく、中年期がピークで老年者は若い成人や中年期の成人より流暢性は低い、独創性では差がないことが証明された。つまり創造性に関す

る知能（拡散的思考）の低下は質（独創性）よりも量（流暢性）に顕著にみられることが理解された。

Simonton (1989) は過去5世紀の間に生きたクラシック作曲家175名の最晩年の作品を調べた結果、死の直前に創造性の復活があることを明らかにし、「白鳥の歌現象」（つまり白鳥が死に瀕して歌うという伝説からフランツ・シューベルトの最期の歌曲集に編纂された曲の中に以前にはみられなかった人間の深奥な意味を暗示する作品が認められ、その歌曲集が白鳥の歌と名づけられた）と呼んだ。また他の研究 (Lorenger-Huber, 1991) における64～92歳の画家を対象としたケーススタディによる結果でも60代後半から70代で創造性の上昇がみられることが明らかにされている。しかもこれらの研究から、知能の高い人が必ずしも創造的であるとは限らないという、創造性に関与するものに知能は唯一、絶対的必要条件とはいえないことが認識された。

Sternberg (1985) により創造性と知能との関係に英智が加えられて研究された。つまり、英智、知能、創造性の概念におけるそれぞれの構成要素が賢人の特徴をイメージした行動評定の因子分析から導かれた。そしてこれら3つの関係が検討された結果、英智と創造性とはそれぞれ知能とは関連性が認められたが、英智と創造性とは比較的かけ離れていることが理解された。

さらに Sternberg (1985, 1987, 1990) は、英智、知能、創造性の研究が今まで認知的な心理機能の面に限ってなされていたことから、人格や動機を含めた広義の意味にとらえなおし、6つの変数、①知識、②知的過程、③知的スタイル、④人格、⑤動機、⑥環境的布置状況、により、英智の人、知能の人、創造的な人のモデルを記述することを試みた。中西 (1995) により Table 1 のようにまとめられているが、それを参考にそれぞれのモデルの具体像を知ることにする。

知識面では、英智の人は彼らが知っている知識、知らない知識、知ることができない知識を知っていて、知識の意味と限界を知っている。知能の人は記憶した知識を再生し分析し、最大限の活用を考える。創造的な人は存在する知識



Table 1 英智, 知能, 創造性の比較

側面	英智	知能	創造性
(1)知識	その限界と同様に前提や意味を知る	再生, 分析, 活用	知りうること以上のことを行く
(2)知的過程	自動的なこととその理由を理解する	手続の自動化	新しい課題への応用
(3)知的スタイル	批判的判断力	効率的実行力	立法的発想力
(4)人格	あいまいさや障壁の理解	あいまいさを除去しふつうの枠組みにおける障壁をのり越える	あいまいさへの耐性と障壁の再定義
(5)動機	知っていること, それの意味していることを理解する	知っていることと知られていることの活用	知られていることをこえて前進する
(6)環境的布置状況	環境を深く理解するような評価	環境を幅広く理解するような評価	環境を現在知られていることを越えて前進するような評価

(Baltes & Smith, 1992 中西, 1995 英智の心理学 P.80より転載)

を超えて新しい知識を創り出す人である。

知的過程では、英智の人、知能の人、創造的な人、それぞれは同じようであってもその用い方が異なる。英智の人は思考過程の自動化に疑問を持ち、なぜそうするのか考える。知能の人は自動化を推進し、もっと効率的にルーティン化し、優れた知的能力を示そうとする。創造的な人は自動化に抵抗するが、なぜそうするのか疑問を持たず、新奇なものを求める。

知的スタイルでは、たとえば問題を解くような場合、英智の人はなぜその問題が取り上げられたのかを考えようとし、知能の人は問題に対して効率的な知的作業を行う。創造的な人は問題に対する正解以外のまたはそれ以上の解答を出そうとする。

人格面では、英智の人は、曖昧であることは事物の性質の基本として理解し、

自己と環境との関係は果てしのない弁証法的な繋がりであることを洞察している。知能の人にとって曖昧さはすぐにでも解決されるべきもので、それは問題解決を妨害するものとして対処する。創造的な人は曖昧なことは存在しないかのように振る舞い、あるいは再定義して考える。

動機づけでは、英智の人は物事や現象の根底にある意味や構造を理解しようと動機づけられ、知能の人はより多くのことを知ろうと動機づけられる。創造的な人は今知られていることを超えて新しいことを知ろうと動機づけられる。

最後の環境的布置状況では、英智の人は環境を深く理解し、イメージや架空のものにこだわった迷った見方をしない。知能の人は環境を大きな視野で評価し、正確に見通すことができる。創造的な人は一般的な見方とは異なった知覚で環境を見たり、それ以上のことまで見抜くことができる人である。

以上のように、心理学における英智、知能、創造性について人格化したときの概念が検討されてきた。まとめて表現すると、英智の人は自分がものを知らないことを知っている、洞察力のある人であり、知能の人は正確さを追求する合理的な思考のできる人であり、創造的な人は今までに存在しないものを創り出そうとする人、といえるであろう。

「成功する老年期 (successful aging)」を主唱した Baltes ら (Baltes & Baltes, 1990; Baltes, Staudinger, Maercker, & Smith, 1995) は創造性と知能との関係についてすでにふれた Wechsler (1958) や Cattell (1963) が示した「言語性知能：結晶性知能」と、「動作性知能：流動性知能」という二元論を基本としながらも、これら両者を連続したものとしてとらえ直した知能の理論的枠組みを示した。つまり Fig. 3 のように、知能の機械性 (mechanics：ハードウェア、生得的な知能指数や生まれてから訓練を受けて獲得した基礎的情報処理のプロセスを意味し、加齢により低下が予想される) の延長線上に、知能の実際性 (pragmatics：ソフトウェア、文化や経験に基づく豊富な知識により形成された事実的な思考プロセスを意味し、加齢とともに発達する可能性が仮定される) が機能するとされた。そしてこのような知能の二重の過程において英智の

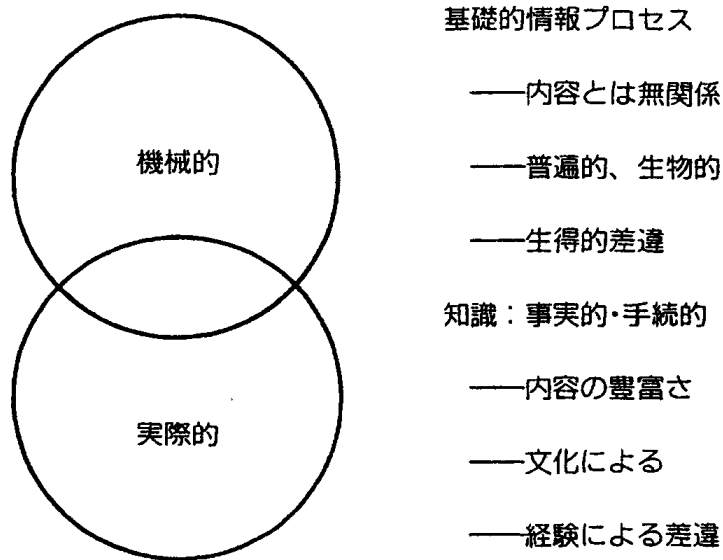


Fig. 3 知能の二重過程の枠組  
(中西, 1995 英智の心理学 P.73より転載)

発達が仮定された。さらに英智は複雑な思考が可能となる年齢に発揮される知的能力でもあることが推測された。

### 3. 英智とは何か

前述したように、Baltesら (Baltes & Baltes, 1990) が英智と知能との関連性を発達論から理論づけようとしたことを理解したが、彼らはまた英智の概念については不確実性に対処する能力を重視して、「それは価値観、感情、思考、行動をまとめ統合することに反映させる」という見方を示した (Baltes & Smith, 1990; Labouvie-Vief, 1990)。彼らは英智とは実際の生活の中で賢明な判断をする人生の熟達者に対して当てはまると考え、実践的英智 (practical wisdom) の概念を明らかにして研究を続けた。こうした概念をめぐり多くの探索的な研究がなされてきたが、Fig. 4 に示されているように、人生計画と人生回顧という2種類の人生における困難な、また困難であった問題の解決を指標にして30歳頃の若者と60歳頃の年配者を対象に調査された結果、高齢者の方が若年者よりも難しい人生の問題 (標準的でない問題) も日常の人生問題 (標準的問題) でもよりよい判断をしたことが評価された (Baltes & Smith, 1990; 中

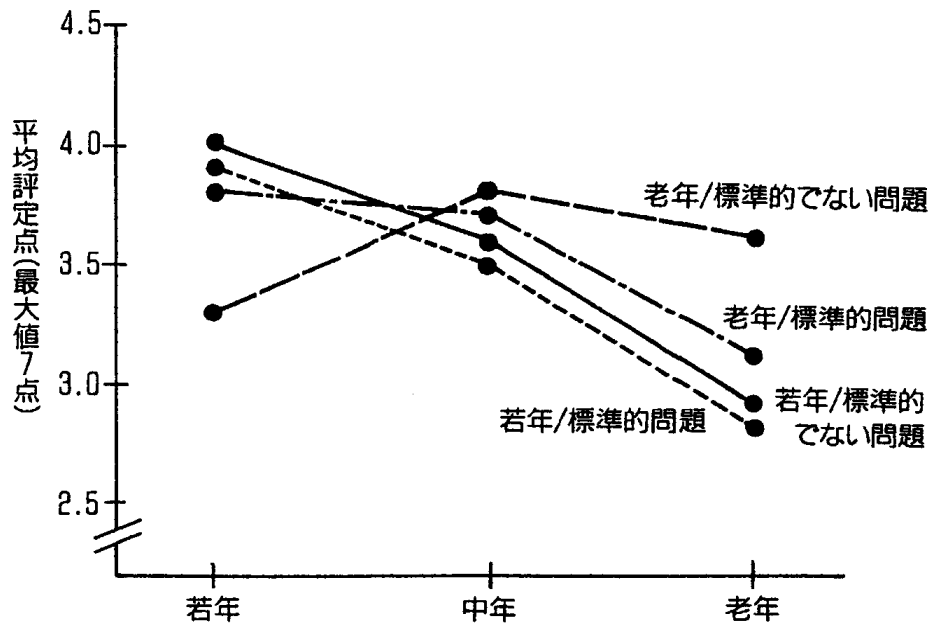


Fig. 4 年齢による問題解答の評定点

(中西, 1995 英智の心理学 P.84より転載)

西, 1995)。

こうした実践的英智だけでは英智の概念としては十分ではないことも指摘されている。つまり英智のもう一方の意味について、Holliday & Chandler (1986) や Orwoll & Perlmutter (1990) らが emancipatory (解放性) と表わし、Erikson (1982) は transcendent (超越性) と表わした。

周知のように、Erikson (1950, 1963) の発達論では、人は生涯のいろいろな時期に発現する素因に対して発達すべき心理社会的課題があり、人生の最終段階には「自我統合／絶望」という発達課題が示された。つまり老年期には自己の人格を心に適うようにまとめることができるか、反対にそれに失敗すれば、もはややり直しがきかない自分自身や人生に絶望するかという葛藤の中で、その葛藤を乗り越えることと英智の発達とが強く関連していることが示唆された。Erikson (1982) はむしろ英智の本質的な意味としては「自己超越」を主張し、それを老年期の人格特性の一つとして捉えている。また Jung (1935 / 1965) は人生の後半生を「個性化過程」とし、自己の心の深層においてさまざまな実存的価値、生と死、若さと老い、愛着と喪失のような対極のものに対

する葛藤解決を乗り越えて、自己を超えた「集合的無意識」への到達を英智の発達への道であると示唆した。Kohut (1977) もまた彼の自己対象論に基づいて、自己の成長の頂点を「心理的宇宙の中心」あるいは「率先性と受容の中心」と表わして、自己認識の最も統合された特徴について個人を超えた理想と、その人が同一視している世界との共感にあることを強調した。

これらの見解はいずれもアイデンティティのような自己の価値を求めて自己にしがみつ়くことを超えたものであることを示唆している。西平 (1993) はそれを「自己を一旦放棄しながら改めてもう一度放棄した自己をもってこの世を生き直して行く姿」、「自己は無であることを受け入れるからこそ最も現実的な強さを発揮する」と表現した。つまり人間としては限界の高い精神力が示唆されたものと考えられる。そして個人や人間の限界を知った上で、人生の意味や、その人生の中で出会ったかけがえのない人々との共同的で生き生きとした関係を築いていくという崇高さに満ちてしかも最も人間的なもの、抽象的で深遠で「現実 (事実性)」を超えた何かが、現実 (アクチュアル) にあること、しかも人はそれを必要とする、とも表わされた (西平, 1993, Pp. 149-155)。

以上のような英智の概念を人格的特性として実証的な研究に乗せることはとても不可能に思えるような中で、近年意欲的な研究報告が提示された。Wink & Helson (1997) はカルフォルニア、オークランドにおける Mills College 4 回生女子群に対する同一対象者の追跡調査によって英智の縦断的研究を試みた。これら被験者 (141人) の27歳、43歳、52歳のときに人格調査がなされ、27歳と52歳の調査のときは彼らの夫ら (夫の平均年齢: 31歳、56歳) にも調査への参加が促された。最終的に彼女らが52歳のときの調査に参加した人数は女性94人、男性44人であった。

彼らの研究における英智の概念は、①実践的英智 (practical wisdom) と②超越的英智 (transcendent wisdom) の2次元構成要素に基づいていた。前者は The Adjective Check List (ACL; Gough & Heilbrun, 1983) から「実践的英智スケール (PWS)」が導かれた。後者は女性群被験者が52歳のときまでに行わ

れた追跡調査において、彼女らとその夫による自由記述が分析された。質問項目は「多く人は高齢になるにつれて賢くなろうと望んでいます。あなたがすでに自分の内にそなわったと思われる英智について述べてください。またそれをどのようにして獲得したのか具体的に示してください」であった。4人の判定者が彼らの回答を分類し、5件法による評定をした。最高点の5点は、自己超越、洞察、知識の複雑性とその限界、思考や感情の統合、哲学的、宗教的認識の深さなどの抽象的な英智のキイ概念を示した回答に与えられ、4点には自己超越的な側面や抽象的表現がやや少ないもの、3点には耐性、思慮深さ、信頼性の欠如、自縛的側面などを示していたものが当てはめられ、2点には有り得ないような背伸びをした態度や、反対に絶望感や皮肉に満ちた回答が当てはめられ、自己超越や自己発展に著しく欠ける回答は1点とされた。

Wink & Helson (1997) らは、これら2つの英智を分析し関連性を検討したが、「実践的英智」と「超越的英智」とは女性群では相関関係は認められず、男性群に僅かの関連性がみられたと報告している。このことから2つの英智の内容は異なったものであると考えられた。

さらにこれら2つの英智について、自我発達や自律性などの心理学的側面を測定するスケールによる調査結果との関連性が検討されたが、いずれの英智の内容とも関連性が認められた。このことから両方の英智の能力を有する人は複雑な問題に対処できる知性と真摯な態度を持ち合わせ、将来を見透すことができる洞察力を持ち、客観的な姿勢を保つことができると解釈された。そして「実践的英智」と「超越的英智」の両方は英智 wisdom の二大構成要素であるという彼らの仮説が支持されたと考えられた。

ところが「実践的英智」と「超越的英智」は、さらに他の人格テストとの関係が検討された結果、両者には関連している変数に相違がみられた。つまり「実践的英智」は「社会的な率先性」、「リーダーシップ」、「共感性」、「人々への世話」と関連し、「超越的英智」は「経験に対して開かれた心」、「直観性」、「創造性」などと関連していた。この結果は2つの英智の内容がそれぞれ異なっ

た人格的特質と関連していると考えられた。

英智の発達に関しては、Wink & Helson (1997) の研究はデータ処理上の問題から「実践的英智」のみに関して分析された。女性も男性も20代から50代の25年間にその発達が認められた。もっともこれら被験者のほとんどが高等教育を受けた人達であり、社会的適応性や知性が高いという要因は考慮しなければならないことが特記されている。そして、もしこのような英智が経験の量や質に関係するならば、この研究の被験者のような環境で年齢を重ねると英智の発達の可能性は高いものと考えられた。また「実践的英智」は他のもう2つの変数、①職業（心理療法家）と②ライフイベント（離婚）に関して加齢による変化について検討されたところ、職業では、心理療法家とそうではない人との間には、27歳の時点では心理療法家の方が低かったが、52歳のときは心理療法家の方が高いことが判明した。このことは職業が英智の発達の要因になりうることを示唆していた。ところがライフイベントは年齢との関係で英智の発達の要因としては不明瞭な結果となった。それはデータの不備により適切な統計処理によって検討ができなかったことによる。ただ52歳の時点での検討では、「実践的英智」の得点で離婚した人の方が高かった。彼ら離婚した人の27歳時の得点は他と比べて低いわけではなかった。これだけのデータで検討することはできないとされながらも、少なくとも離婚した人に限って言えば、彼らが経験したライフイベントは英智の発達を促した可能性も考えられると解釈された。

このような Wink & Helson (1997) の研究から、英智は人格的な特性と関連していること、「実践的英智」は中年期に高まっていくこと、そしてそれは職業やライフイベントのような経験が発達に寄与する可能性を示唆した。しかしながらお概念や研究方法の整備が今後の課題であり、データの蓄積が望まれる研究領域である。Wink & Helson (1997) は「我々が採用した測定スケールが十分なものとは考えてはいない。不備な面を問いかけるつもりで研究に着手した」と述べているように、こうした研究は始まったばかりのものである。しかしこの研究から少なくともすでに理論家達が指摘してきたように、英智が若

年層よりもより中高年層に高まっていく能力であることが実証され、人格の発達と関連していることも認識された。そこで次項では、高齢者の人格の発達との関係から英智について考えていく。

#### 4. 高齢者の人格と英智はどのように関連しているか

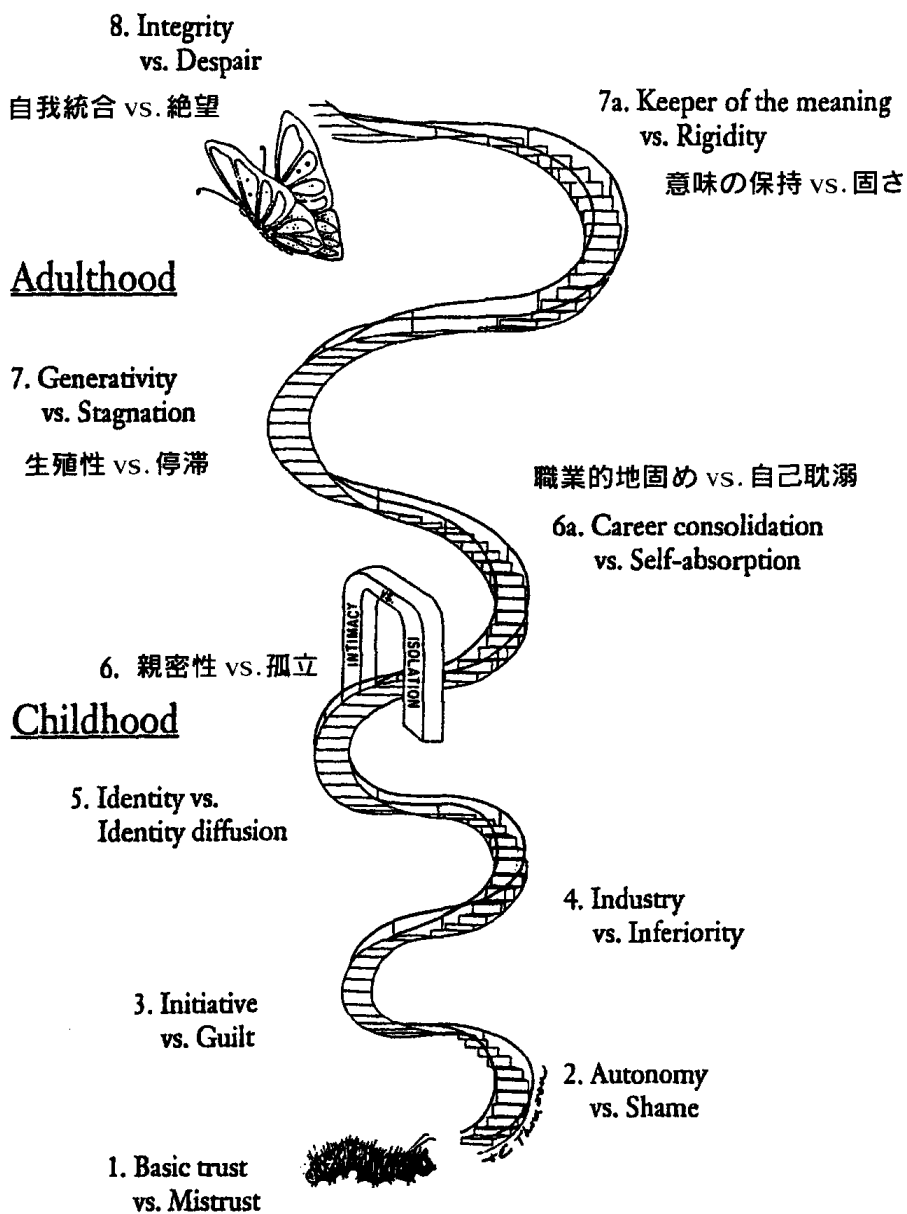
Jung は老賢人 (wise old man) という「元型」を表わし、英智の人の象徴に高年齢の男性をイメージしたが、このような人格像は“老賢女”にも当てはまるのであろうか。儒教の『論語』の中に「ただ女子と小人とは養い難しと為す。これを近づくれば則ち不遜なり。これを遠ざくれば則ち怨む」(卷九微第十八) という有名な言葉には、女性の人格と英智は無関係のように感じさせる。しかし他方、近年の成人の心理学的発達についての研究者である Orwoll & Perlmutter (1990) は、英智は人格と認知力 (知性、知能) にかかわると考え、人格の発達と年齢は英智の発達に寄与するが、性別との関連性はほとんどないという考えを強調している。また、認知力についてもその種類や量、発達の時期によっても英智との関連性は異なることを示唆した。

Erikson (1950, 1963) が人生の最終段階における人格発達の頂点に英智の能力を主唱したことはすでにふれた。彼の理論の熱狂的な支持者と自ら称した Vaillant (1993) は、人には自我 (ego) という一つの一貫した心的過程がみられ、その発達のために人はさまざまな防衛様式を選んで適応、不適応を示すと仮定して、成人の人格発達を縦断的に研究した数少ない精神科医である。彼はそうした自我防衛の選択には社会階層や教育、またジェンダーによって左右されないことを強調し、英智とジェンダーの問題は取り上げてはいない。このような彼の自我の考え方による英智の発達について次に概観してみる。

Vaillant (1993) は熱狂的な Erikson 理論の支持者といいながら、理論の修正をして実証を試みた。つまり Fig. 5 のように、青年期の段階の「同一性／拡散」(5) から成人期の入門 (6) 「親密性／孤立」へ、次に「職業的地固め／自己耽溺」(6a) を加え、「生殖性／停滞」(7) へ移行するとした。そして最



終段階には「意味の保持／固さ（頑固さ）」（7a）を加えて、老年期の「自我統合／絶望」（8）へと完結される螺旋状の成人の自我発達図式が示された。彼は Erikson（1950, 1963）が仮定した年齢と対応した段階を強調しないで、むしろ Havighurst（1953）による発達課題の推移の考え方を強調した。Erikson 及び Vaillant の両方の図式とも自我の発達を表わしたものであるが、自我、ego



*A model of adult development. (This is essentially Erik Erikson's model of the adult life cycle with the addition of Stages 6A and 7A.)*

Fig. 5 成人の自我発達モデル (Vaillant, 1993)

というのは Freud, S.(1864～1938) 以来の精神分析の用語である。精神医学者、Vaillant (1993) の説明によると、自我は頭脳の働きをさすが、精神内界と外部世界の現実とを統合し、過去と現在を融合させ、いろいろな感情を統制してまとまりのある考えを打ち出したりする心の働きを意味する。Vaillant (1993) は「自我とは世界に適応し同化するための統合的な心の働き、力」(P. 7) であり、人格の発達と成熟は人とその社会環境との相互作用を通じて生じ、経験とは心に生じるものではなく、心が経験とかかわることであると述べている。したがっていかに心が経験を操作するかが自我の発達の核心となり、そこに防衛のような心の働きや「創造性」の潜在力が介在したり、また加齢が影響を及ぼしたりして、成人の人格的発達が理解されると説明された。Vaillant (1993) のこうした自我の視点からは、英智は統合的、適応的に働く神経組織の中心と考えられた。このように Vaillant (1993) は Erikson 理論を修正、増強し、現代の成人発達の理論家ら、Levinson (1978/1992)、Kotre (1984) や、Clayton & Birren (1980)、やまた Baltes & Baltes (1990) らの新しい見解も視野に入れて成人の自我の発達における英智について検討している。

Vaillant (1993) は英智の発達については、中高年の自我発達にかかわる「意味の保持／固さ」という発達課題を想定した中でそれを提唱している。「意味の保持」とは集団や個人を超越して他者や世界に接近していくことを意味するという。つまり卑近な周りの環境を超えた社会的広がりによって考えをめぐらせ、人間文化の存続に尽力する能力である。たとえば、“怨みを向ける敵はいない”と宣言して、南北戦争の傷を癒そうとして平等主義を掲げた米国大統領、アブラハム・リンカーンと、冷戦時は“悪魔の帝国”といわれたアメリカの大統領となって、市民中心の福祉政策を執行したロナルド・レーガンの二人の個性的な自我が英智を発揮させ、今に至り人々に貢献していることがあげられている。「意味の保持」の反対の「固さ」とは、狭い見方で凝り固まった高齢の人達の中に常に見い出すことができる。また Vaillant (1993) は「意味の保持」には人間文化の存続への志向とともに「世話 (care)」と「正義 (justice)」が含蓄

されていることを強調した。これらの意味内容は、Erikson (1950, 1963) が中年期の発達課題とした「生殖性」の意味内容に近接していると考えられる。Vaillant (1993) は、「意味の保持／固さ」の発達課題の取り組みが英智に先行していることを強調している。彼は一般的に“世話すること”に特に英智が関与することはなくても、“世話”のない英智の概念は考えられないと述べている。つまり Erikson (1950, 1963) が中年期の発達課題と想定した自我の発達が英智の発達の必要条件とみなされた。

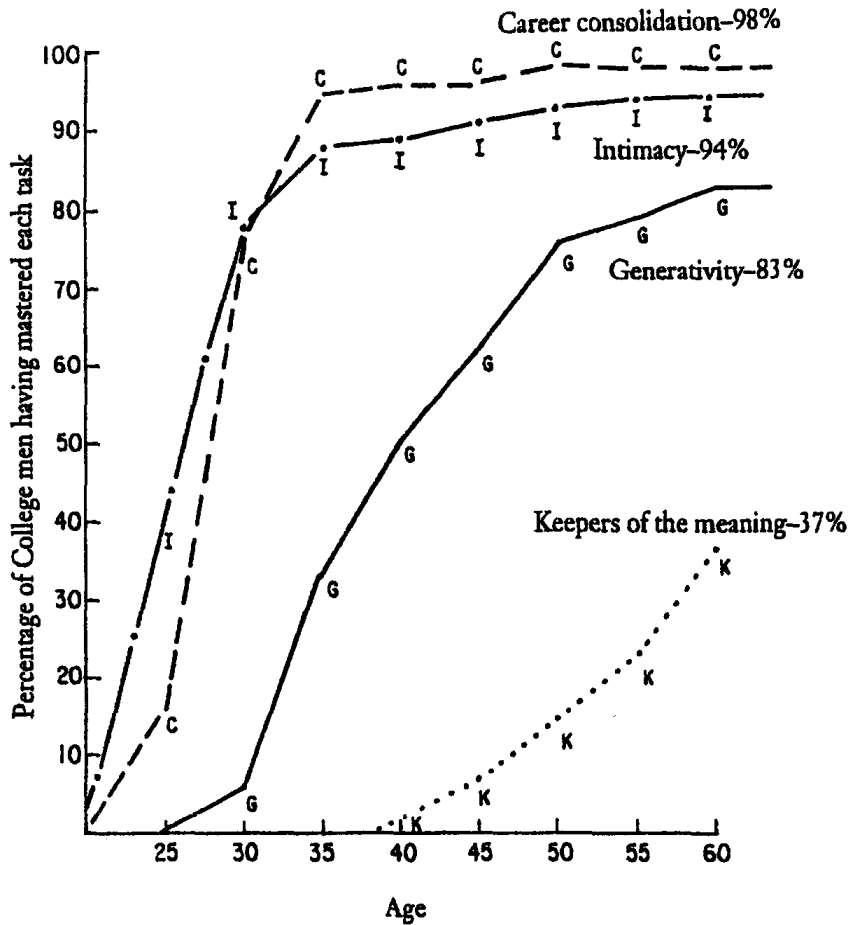
旧約聖書の古事に現われるソロモン王や、シェイクスピアの『ベニスの商人』におけるポーシャの例は、英智が「世話」と「正義」という力における自我機能によって生じたものと考えられた。そこで Vaillant (1993) は、英智とは、自分の心の中に生じる矛盾を認め、反論を受け入れるスタンスを取り、過去、現在、未来の拮抗する事実関係を同時に把握し、その中に自己の見解を反映させることであり、アイロニーや曖昧さを必要とするもので自我の高度なスキルであると表わした。そしてそれは人生の後半生に発達する能力と考えられた。

以上のような理論の実証に、Vaillant (1993) は3つの成人発達研究のデータを用いて検討した。これらの研究は、①「The College Sample」と呼ばれ、Harvard University Health Serviceによって1938年に調査が開始され、1939～1942年の間に268人の大学2回生を対象者として、成績、精神健康状態、知能、精神科疾患、心理社会的発達状況について質問紙と面接によって調べられた。次に②「The Core City Sample」と呼ばれるさまざまな社会階層のコホートからなる456人の白人男性が対象とされ、14歳、25歳、32歳、47歳時に追跡調査された。医師、心理学者、精神分析家、社会調査専門家によって1940年代から開始された大規模な調査で、「少年非行」が研究の目的とされた。最後は③「The Terman Women Sample」と呼ばれる研究で、Terman (1925) によるIQの高いカルフォルニア地方の女性672人の母集団における90人を対象者として、Vaillant & Vaillant (1986) らによって再度面接が施行されて、多くの局面における成人の発達調査がされたものである。

Vaillant & Vaillant (1986, 1990) は上記3つの研究データの比較から、それぞれのグループの間には、性別、教育年数、知的能力、社会参加の機会、両親の社会的階層、子どもときの環境、両親との関係等に相違がみられるにもかかわらず、心理社会的発達課題の達成に差異がみられなかったことを発見した。

次に彼らは「The College Sample」における成人の心理社会的発達課題（「親密性／孤立」「職業的地固め／自己耽溺」「生殖性／停滞」「意味の保持／固さ」）の達成は、仮説通りであることを見出し、Fig. 6のように表わした。彼らはそれぞれの発達課題の実現が10年間続いた場合を指標として分析をした。その結果、一般的に成人は20歳代に配偶者や恋人を見つけ、家庭生活や愛情関係を築き（「親密性／孤立」）、同時に自らの職業生活を本格化して発展させ（「職業的地固め／自己耽溺」）、身近な人々、家族、子ども、知人、先輩、後輩、友人達との関係性の中で、育み世話をする（「生殖性／停滞」）ことにかかわり、そうした能力を人格の中に組み込んでいく、人格の成長、自己発展の成熟の過程が示唆された。そしてそれぞれの発達課題の達成は、期待される年齢的時期に高まっていったことも理解された。英智の発達と関連した「意味の保持／固さ」については40歳前後に発現し、年齢と共に高まっていくことが判明した。

Fig. 6をより詳しく見てみると、成人は30歳前後で「親密性」を先行させつつ「職業的地固め」が8割近い完成度に近づいていることが分かる。その後60歳くらいまでは「職業的地固め」が優位に立ち、それは完成の域に近くなる(98%)。IQの高いThe Terman Sampleの女性グループは65歳あるいは70歳でもキャリアの花を咲かせることも報告された。ところが「親密性」は60歳においてもなお完全ではない。「親密性」と同じく他者や環境との相互性や関係性が求められる「生殖性」は、「親密性」や「職業的地固め」より後れて発現し、やっと軌道に乗りだした30歳頃に急伸し、60歳には8割以上の発達を示している。Vaillant (1993) は、個人が自分の重要な生き方を決めるキャリアの確立



Age of mastery of selected psychosocial tasks.

Fig. 6 成人の心理社会的発達課題の達成 (Vaillant, 1993)

こそが他者との関係性（「親密性」）や、他者や環境への貢献（「生殖性」）に寄与し、ひいては英智の発達につながるという仮説を持っていた。Vaillant (1993) はこの仮説を実証的に把握したが、このことは Erikson 理論では「親密性」と「生殖性」また創造性や英智における自我の力動的な機能の側面が十分説明されていなかったことを認識させる。Vaillant (1993) の仮説は、個人の職業的地固めといういわば自己中心的な自己実現のための心理社会的傾倒がむしろ、その対極の他者への傾倒にかかわる親密性や生殖性の発達に働く動因となるという点が興味深く注目される。

「意味の保持」に含蓄されている英智の発達は Fig. 6 において、40歳前後から発現し、60歳においても、その発達は4割にも満たない。このことは中年期

以降にも発現し、発達するパーソナリティの局面が認められるとともに、60歳くらいでは未だ、“賢人”とか、“英智の人”とみなされるにたる人格的な能力を有するとはいえないことが理解される。

## 5. 英智の人の人生とはどのようなものか

すべての人が英智の能力を発達させて一生を終えるわけではないだろう。英智の人とはどのような生涯をたどる人なのであろうか。従来から「見本法」といわれる方法で、実在した賢人の生涯と人格について研究されてきた。ゲーテ、リンカーン (Maslow, 1970) や、レンブラント、フロイト (中西, 1995, Pp. 104-199) の研究があげられる。

本稿では上記のような事例史にふれることよりも、今一度、最初に自我の生涯発達における英智の概念を提唱した Erikson (1950, 1963) に立ち返って、彼がライフサイクルからみた「真に意味あるモデル」として選んだ人について理解していきたい。それはスウェーデンの映画監督、イングマール・ベルグマン (Ingmar Bergman) による映画「野いちご」(Wild Strawberries 1957) の主人公の医師、イサク・ボールイ博士であった。映画では、老年期に入った主人公ボールイ博士が子どもから大人に、そして医師となった発達段階の自我の心理的世界を描写するとともに、そこに彼が今までたどってきた人生における場所や触れ合った人々を記憶と幻想と夢の中で改めて眺められるという表現法が用いられている。そして今、死が身近になった老境に入って劇的に変化を見せる博士の心理的世界をともにたどることができるという感動を、観るものに与える素晴らしい芸術作品である。この映画はハーバード大学での「人間のライフサイクル」という講座において毎回使われたという。

筆者がこの映画を30歳頃に見たときの印象では、この映画を観る人がたとえボールイ博士のような地位や名誉のある人でなくても、彼のたどってきた人生とその心理的世界をともにすることができる強い共感を体験したことを記憶している。また自我発達論などの理論を知らなくとも、一人の天才によるこのよ

うな作品は瞬時に理論以上のものを観る人に感得させることができると納得させられた。

そのボールイ博士は老年期を迎えていた。しかし彼は尊大で横柄な人物で、問題を抱えて彼を訪問している息子の嫁にも冷たく、息子夫婦にかかわることを拒否し、弱いものや無意味にみえるものに侮蔑の態度さえ示していた。映画はそのような彼が50年間医者をしてきた人に贈られるスウェーデン最高の賞を受けるために、「五十周年」の壮麗な儀式の開催地であるルンドという町に自ら車を運転して、そこに訪問していた息子の嫁と出かけたほぼ一日の旅を描いたものであった。その旅の間で発生する事件や、人との出会い、再会の経験とともに、主人公と登場人物の人生のすべてと、発達段階、相互の作用も彷彿とさせ、彼らの過去と現在の心理社会的な背景が伝えられる。

こうした背景から、ボールイ博士はこの旅の前は客観的には成功した職業的地位を何十年も維持し、医師という役割から人々への貢献、世話を十二分に果たしてきて、中年期までの発達課題を達成した高度な自我機能を持った人物であることが分かる。ただ妻を不倫に追い込み離婚し、一人息子ともその関係は不本意なものであったため親しい人間関係は面倒で切り捨てるという態度を貫いたらしく、ボールイ博士の「親密性」は低いレベルであったようである。しかしながら世間的には彼は有能な医師として尊敬され、細菌学の研究者としても高い知性と創造性を発揮して敬われるべき成功した老年者としてみられていたことが分かる。もしこのままルンドで榮譽に包まれて元の生活に戻っても、外面的には何の変化もないであろうと思わせた。しかし彼は無事ルンドに着き壮麗な式典の最中にも深い物思いにとらわれた。旅の途中でヒッチハイクをしていた若者達を車に乗せ、その上、車の故障のため彼の車に乗り込んできた中年夫婦の車の中でのいさかいにみまわれ、その大人達の醜さから若者達を守ろうとした息子の嫁、これらのことは博士自身の過去の過ちや、“自分が無知であることを知る”のに大変なインパクトを与えた。彼は旅の間にすでに、そして旅の後に劇的な変化を示した。彼はこれから「過去の出来事を思い出してす

べてを書き留めること、またこれからの日々については細部にわたって正確に日記に記録すること」を決意した。日記を記すことによって自己治癒を行い、老年期にあってなお自我の成熟への前向きな博士のバイタリティが暗示された。

Erikson ら (Erikson, Erikson, & Kivnik, 1986) はこのような主人公の日記の意味するところは、波乱の多かった永い人生のさまざまな経験を一つの意味のあるものにまとめたいという欲求を示し、バラバラなものを意味の明瞭な全体へと統合することであると述べている。Erikson (1950, 1963) は人生の自我発達の最終段階を「自我統合／絶望」と示したことはすでにふれたが、それは老年期の心身のさまざまな能力の喪失にもかかわらず全体性を維持するために必要な力を発揮しようと“決意”する、老いゆく人間の高度な力で、それを象徴する言葉として彼は「英智」を用いた。Erikson 理論は各人生段階における自我発達の発達課題に人は同調的に努力するか、非同調的に陥るかの葛藤の中に、バランスを保とうとする意志の力が働くことが想定されている (Erikson, 1982)。つまり周囲からいろいろな刺激を受けて発現する自我の能力を発達させるか、させないかも個人の選びとるべき問題であることが示唆されているのである。特に多くの喪失を余儀なくされる老年期に“独自の個性を持つ自分”を自負していた誇りも捨てて、もっとより重要な意味を見い出し、世界とのより開かれた新しい関係を発展させ、生き直すことを決心する“英智の人”の姿が暗示されている。

わがボールイ博士がもしも日記をつけるという考えも及ばないで、ただ気配な旅で疲労感にとらわれて元の生活に戻ったのみの人であったならば、相変わらず尊大で、横柄で、過去の栄光と自己防衛に凝り固まった誰からも愛されない哀れな老人として終焉を迎えることになったかもしれない。そのような場合、彼の英智の人格的能力は開花することなく根源的な絶望感にとらわれて、結局は自我統合に失敗したかもしれない。

人は長生きするだけで高次の人格的特性を発達させるとは限らず、最晩年に



においてもなお人格的発達のバランスの危機にみまわれる。いったいその要因は何であろうか。過去アメリカでは人格発達研究で50年にもわたって行われた縦断研究が幾つかある（The California Longitudinal Study：パークレーとオークランドの研究，1929-1970）。それらの研究結果のうち中年期から老年期への人格的発達と老年期における適応が検討された興味深いものがみられる。つまりそこでは、①中年期から老年期にかけての人格の安定性が示されたこと、②中年期の人格的特性の強さ／弱さが老年期の人格の変容を予測せしめること、③中年期で適応的な人格的特性を持つ人は人生を通して良好な自我機能を維持するが、反対に中年期で常軌を逸した行動パターンを示した人はそれが老年期にも永続する可能性がみられるという報告があった（下仲，1988）。これらのことは、中年期の30年にわたる人格的機能の安定性は、人格の強さと安定性を示し、そのような人はそれ以後みまわれるストレスにも対処することができ、老年期の人格的発達の可能性がより高いことを示唆した。人格にはさまざまな構成要素が認められ、論者の理論構成により表現には相違がみられる。本稿で主として取り上げた心理社会的自我発達論（Erikson, 1950, 1963; Vaillant, 1993）によるもの、また最近では「5因子性格特性論」（Costa & McCrae, 1992; McCrae & Costa, 1983）が主唱されている。しかしどのような理論構成であっても、人格が多次的構成要素からなり、人はそれらすべての人格特性を完全に成就するわけでもなく、生涯それらを完全に維持できるわけでもないだろう。

わがポールイ博士は「親密性／孤独」の発達課題の葛藤解決に十分取り組まなかったため、成人期には情緒的に安定していたことは想像されにくいし、孤独な面もあったと考えられる。こうした彼が老年期の自我統合への可能性を示した要因は、医師と患者という関係においては永らく成功してきた、それをよりどころに彼は中年期に人格の安定性を維持してきたといえよう。そしてあの旅をきっかけに、目を向ける対象を自分自身や身近な家族に置いたとき、より新しい洞察へと導かれ、患者に対したときのような適応的な自我機能のメカニ

ズムが現れ、彼の人格はよりオープンで高次の変容がもたらされる可能性が暗示された。それはポール博士が真に成功した老年期をこれから過ごすことがイメージされるのみならず、彼の人格の素地にあった柔軟性や開放性の特性がそうした変容への要因となっていたことが理解される。筆者（丸島，2000）の研究結果からも、Erikson 理論（Erikson, 1950, 1963）による成人3段階における発達課題（親密性、生殖性、自我統合）について、中年期に良好な発達を示している成人は自尊感情の高い人格特質（「達成」因子）と、環境や他者に対して開かれた能動的な特質（「適応」因子）が機能していることが判明し、建設的な老年期の自我の発達が推測された。

## おわりに

21世紀の高齢者のイメージを求めて“英智の人”を考えてみたが、難しいテーマであることが認識された。多くの中高年齢者にとってまだまだ未知の内面的問題であると思われる。

ノーベル賞作家で詩人であったヘルマン・ヘッセ（1955）最晩年のエッセーの一部を引用して締めくくりとする。ヘッセは思春期には、「境界性人格障害」を疑われた混乱と激しい性格を示し、自己と世界との相克に苦しみ、対人関係に悩み、常に孤独な葛藤の中で創作活動を続けていた。ユング派の精神分析を受けた経験を持ったことも知られている。しかし彼は創造的な中年期を経て、85歳の長寿を全うした。ヘッセが老いを語る次のような文章がある（Hesse, 1952）。

「ここ、老人の庭には、昔ならその世話をすることなど考えもしなかった沢山の草花が咲いている。そこには忍耐の花という一つの高貴な草花が咲く。私たちは次第に沈着になり、温和になる。そして介入と行動への欲望が少なくなればなるほど、自然の生命や同胞の生命に関心を持って眺め入り、耳を傾け、それらが私たちがのたをらを通り過ぎるとき批判することなく、その多様性にいつも新たな驚きをもって、時には同情と静かな憐れみの気持ちで、時には笑

いと明るい喜びを持って、ユーモアの心を持って眺める能力がますます大きくなってくるのである。・・・

成熟した人間の使命は自我の放棄、あるいは・・・《自己離脱》である。しかしそもそも自己を放棄することができるためには、人間は一人前の人間、つまり独自の個性を完成するための覚醒の苦悩を切りぬけて、成熟した人格を獲得していなくてはならない」(P.86, P.92)。

多分、これからの高齢者は、年齢、学歴、キャリア、ジェンダーのバリアー・フリーという、かつてなかった環境を前にして、柔軟で開放的な心の働きを頼りに生きて行かなければならないという未知の世界を歩いていくことになるだろうと思われる。

#### 文 献

- Blates, P. B., & Baltes, M. M. 1990 Psychological perspectives on successful aging: The model of selective optimization with compensation. In P. B. Baltes & M. M. Baltes (Eds.), *Perspective from the behavioral science*. N. Y.: Cambridge University Press.
- Baltes, P. B., & Smith, J. 1990 Toward a psychology of wisdom and its ontogenesis. In R. J. Sternberg (Ed.), *Wisdom: its nature, origins, and development*. N. Y.: Cambridge University Press, Pp. 87-120.
- Baltes, P. B., Staudinger, U. M., Maercker, A., & Smith, J. 1995 People nominated as wise: A comparative study of wisdom-related knowledge. *Psychology and aging*, 10, Pp. 155-166.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss* (Vo.1). London: Hogarth (N. Y.: Basic Books). (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 1976 母子関係の理論 岩崎学術出版社)
- Cattell, R. B. 1963 Theory of fluid and crystallized intelligence: A critical experiment. *Journal of Educational Psychology*, 54, Pp.1-22.
- Clayton, V. P., & Birren, J. E. 1980 The development of wisdom across the life span: A re-examination of an ancient topic. In P. B. Baltes and O. G. Brimm (Eds.), *Life-span development and behavior*, Vol. 3., N. Y.: Academic Press.
- Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R. 1992 Revised NEO Personality inventory manual. Odessa, Fla.: *Psychological Assessment Resources*.
- Erikson, E. H. 1950, 1963 *Childhood and society*. N.Y.: W. W. Norton & Company. (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 I, II. みすず書房)

- Erikson, E. H. 1982 *The life cycle completed*. N.Y.: W. W. Norton & Company. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnik, H. Q. 1986 *Vital involvement in old age*. N.Y.: W. W. Norton & Company. (朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990 老年期 みすず書房)
- Gough, H. G., & Heilbrun, A. B. 1983 *The adjective check list manual (1983 ed.)*. Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologist Press.
- Guilford, J. P. 1950 Creativity. *American psychologist*, 5, Pp. 444-454.
- Guilford, J. P. 1973 Theories of intelligence. In B.B. Wolman (Ed.), *Handbook of general psychology*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. N.Y.: Longmans, Green & Company. (荘司雅子監訳 沖原豊・岸本幸次郎・田代高英・清水慶秀共訳 1995 人間の発達課題と教育 玉川大学出版会)
- ヘルマン・ヘッセ 1995 V. ミヒェルス編 岡田朝雄訳 人は成熟するにつれて若くなる 草思社 P. 86, P. 92. (Hesse, H. 1952 *Mit der Reife wird Man immer jünger*. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main.)
- Holliday, S. G., & Chandler, M. J. 1986 *Wisdom: Exploration in adult competence*, Basel, Switzerland: Karger.
- Jung, C. G. 1965 The relations between the ego and the unconscious. In H. Read, M. Fardham, & G. Adler (Eds.), *Collected works (Vo. 7, Pp. 173-241)*. Princeton, N.J.: Princeton University Press. (Original work published 1935)
- Kitchener, K. S., & Brenner, H. G. 1990 Wisdom and reflective judgement: Knowing in the face of uncertainty. In R. J. Sternberg (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*. N.Y.: Cambridge University Press, Pp. 212-229.
- Kohut, H. 1977 *The restoration of the self*. N.Y.: International University Press. (本城秀次・笠原嘉監訳、本城美恵・山内正美共訳 1995 自己の修復 みすず書房)
- Kotre, J. 1984 *Outliving the self*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Labouvie-Vief, G. 1990 Wisdom as integrated thought: Historical and developmental perspectives. In R. J. Sternberg (ed.), *Wisdom, Its nature, origins, and development*. N.Y.: Cambridge University Press, Pp. 52-83.
- Levinson, D. 1978 *The seasons of a man's life*. N.Y.: Knopf. (南博訳 1992 人生の四季 講談社)
- Lorenger-Huber, L. 1991 Self-perceived creativity in the later years: Case studies of older Nebraskans. *Educational Gerontology*, 17, Pp. 379-390.
- 丸島令子 2000 中年期の「生殖性(Generativity)」の発達と自己概念との関連性について。教育心理学研究、48-1, Pp. 52-62.
- Maslow, A. H. 1970 *Motivation and personality*. N.Y.: Harper & Row.

- McCrae, R. R., & Costa, P.T., Jr. 1983 Joint factors in self-reports and ratings: Neuroticism, extraversion, and openness to experience. *Personality and Individual Differences*, 4, Pp. 245-255.
- 中西信男 1995 英智の心理学 ナカニシヤ出版 Pp. 34-85.
- 中里克治 1984 老年期における知能と加齢. 心理学評論, 27, Pp. 247-259.
- 中里克治 1995 老年期における知能の発達. 児童心理学の進歩編集委員会(編) 児童心理学の進歩 1995年版, 金子書房, Pp. 263-285.
- 中里克治・下仲順子 1990 老年期における知能とその変化. 社会心理学, 32, Pp. 22-28.
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会
- 西信元嗣 1986 調節と老眼. 戸張幾生編 老人と眼 金原出版, Pp. 9-15.
- Orwoll, L., & Perlmutter, M. 1990 The study of wise persons: Integrating a personality perspective. In R. J. Sternberg (Ed.), *Wisdom: Its nature, origins, and development*. N. Y.: Cambridge University Press, Pp. 160-177.
- Pitts, D. G. 1982 The effects of aging on selected visual functions: Dark adaptation, visual acuity, sereopsis, and brightness contrast. In R. Sekuler, D. Kline, & K. Dismukes (Eds.), *Aging and human visual function*. Alan, R. Liss, Pp. 131-159.
- Schaie, K. W. 1980 Intelligence and problem solving. In J. E. Birren & R. Stoane (Eds.), *Handbook of mental health and aging*. Prentice-Hall, Pp.262-284.
- 下仲順子 1988 老人と人格 川島書店
- Simonton, D. K. 1989 The swan-song phenomenon: Last works effects for 172 classical composers. *Psychology and Aging*, Pp.42-47.
- Sternberg, R. J. 1985 Implicit theories of intelligence, creativity, and wisdom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49 (3), Pp. 607-627.
- Sternberg, R. J. 1987 Implicit theories: An alternative to modeling cognition and its development. In J. Bisanz, C. J. Brainerd, & R. Kail (Eds.), *Formal methods in developmental psychology: Progress in cognitive development research*. N. Y.: Springer Verlag, Pp. 155-192.
- Sternberg, R. J. (Ed.) 1990 *Wisdom: Its nature, origins, and development*. N. Y.: Cambridge University Press.
- Terman, L. M. 1925 Mental and physical traits of thousand, gifted, children. *Genetic Studies of Genius, Vol. 1*, Stanford University Press.
- Vaillant, G. E. 1993 The wisdom of the ego. Harvard University Press. (Chap. 1. 5. 6. 8. 13)
- Vaillant, G. E., & Vaillant, C. O. 1986 An empirically validated hierarchy of defense Mechanisms. *Archives of General Psychiatry*, 43, Pp. 786-794.
- Vaillant, G. E., & Vaillant, C. O. 1990 Natural history of male psychological health, X II: A

- forty-five year study of predictors of successful aging at age 65. *American Journal of Psychology*, 147, Pp. 31-37.
- Wechsler, D. 1958 *The measurement and appraisal of adult intelligence*. (4th ed.) Williams & Wilkens, Baltimore.
- Wechsler, D. 1998 *WAIS-III manual: Wechsler Adult Intelligence Scale III*. Psychological Corporation. (品川不二郎他 1990 WAIS-R 成人知能診断検査法 日本文化科学社)
- Wink, P., & Helson, R. 1997 Practical and transcendent wisdom: Their nature and some longitudinal findings. *Journal of Adult Development*, 4-1, Pp. 1-15.

## Summary

# “Successful Aging” through Transitional Middle-Adulthood Crisis

——What is a Wise Person ? ——

Reiko Marushima

The combination of prolonged survival and reduced birth rate has changed Japan from a young society to an aging, even old, society. An increase in the survival rate means that most people can look forward to a longer adulthood. Life is seen as a progress through the stages of infancy, childhood, adolescence, and adulthood. Adulthood may be arbitrarily subdivided into early adulthood, middle adulthood and later adulthood.

Many studies on later adulthood show that not all age-related changes after maturity involve decay or deterioration. Gains in some aspects of intelligence continue long in later adulthood. At first, researchers in psychology looked for a connection between creativity and intelligence. It soon became clear that a certain level of intelligence would be necessary for creativity to flourish. There is no indication that age-related declines in creativity are the results of declines in cognitive, intelligence function. For one thing, sometimes, the peak of creative productivity takes places during later adulthood, in the sixties, seventies, or even later.

Wisdom is also an aspect of cognition and intelligence that develops with age. An average older adult may not be wiser than an average younger adult, but profound wisdom is likely to develop among the old. Erikson (1982) saw wisdom as the peak of ego development. He proposed that wisdom developed in the old when they found meaning in life and accepted the imminence of

their own death, successfully resolving the conflict between integrity and despair. He also described self-transcendence as another aspect of wisdom. Now, many personality theories incorporate the link between wisdom and personality.

Erikson viewed middle adulthood as a period of both transition and crisis. According to Erikson (1950, 1963), middle age is a time when social norms require that a person should be a productive, contributing member of society, and if an individual has a sense of productivity and contributes to what is socially expected, the individual will have a sense of generativity (intergenerational relations). However, if an individual feels he or she has not fulfilled role requirements, a sense of stagnation, which means a sense of crisis, can result. Some longitudinal studies conclude that evidence of personality stability throughout middle adulthood reflects ego-psychological development for successful aging.